

新約聖書注解シリーズ

エペソ人への手紙

F.F.ブルース

THE EPISTLE TO THE EPHESIANS

A verse by verse exposition

by F. F. BRUCE

新約聖書注解シリーズ

エペソ人への手紙

F.F.ブルース

一節一節の詳細な解説

伝道出版社

THE EPISTLE TO THE EPHESIANS

by

F.F. BRUCE

PICKERING & INGLIS LTD
LONDON .. 1961

目次

序論

- 一、著者について……………5
- 二、執筆の年代と場所……………7
- 三、受取人……………8
- 四、執筆の理由と主題……………9
- 五、初期の用途と承認……………18
- 六、エペソン人への手紙の分析……………20

第一部

神のご計画の中に見られる新しい共同体

- 第一章……………25

第二章……………68

第三章……………95

第二部

信者の歩みの中に表現された新しい共同体

第四章……………123

第五章……………171

第六章……………207

序論

一、著者について

エペソ人への手紙は、他のパウロの手紙と同様、「神のみこころによるキリスト・イエスの使徒パウロ」とパウロの名前で始まっています。三章の初めでも、著者は、この手紙を書いているのはパウロであると語っています。このことが、著者についての問題を決定的にしているように見えます。そのうえ、この書簡の用語と思想がまったくパウロ的なので、そのことは決定的です。とはいふものの、エペソ人への手紙は、パウロの手紙の最初の書簡集が発表された時に、その書簡集のための適当な入門書として役立つように書かれたと、ごく近年まで繰り返し主張されてきました。彼らは、著者はおそらくパウロの弟子の中の一人で、パウロの中心的な教えの注解をし、可能な限りそれを伝えようと努力して、パウロ本人の著作から言葉を借りて書いたのだと言います。

もしエペソ人への手紙が直接パウロによって書かれたのではなく、使徒パウロの名におい

て彼の弟子の中の一人によって書かれたとするなら、その著者は、あらゆる時代の中で最も偉大なパウロ主義者——いまだかつてだれもできなかったほど徹底的に先生の考えを理解した弟子でした。エペソの人たちに手紙を書くことのできた人は、知的水準と靈的洞察において使徒に優らなくとも、匹敵する者でなければなりません。というのは、エペソ人への手紙が、独自の統一した主題を持った特殊な著作であるからです。もし私たちが一語一句それを学ぶなら、それは他のパウロの書簡からの編集のように見えるかも知れませんが。しかし、私たちが後ろへさがってそれを全体として見るなら、それは独自性とそれ独特のメッセージを持っていることがわかります。それは「人類最高の著作」だと評されました。それはパウロ主義の真髄であるばかりでなく、その中に展開されている啓示とその適用は、彼の初期の書簡が表わしている啓示と適用よりも一層高度な段階に属しています。著者は、もしパウロ自身でなかったとすれば、使徒パウロが到達した地点をはるかに越えて、パウロの思想をその至るべき頂点に到達させ、パウロの教えの重厚な構造物の上にかしら石を置いたこととなります。初期のクリスチャンの歴史には、第二のパウロと言われるような人物についての記録はまったくありません。

二、執筆の年代と場所

この手紙を書いた時、パウロが囚人であったことは、手紙の中で再三明確に語られています。彼は彼自身が「あなたがた異邦人のためにキリスト・イエスの囚人となった私パウロ」(三・1)、「主の囚人である私」(四・1)、「鎖につながれた……大使」(六・20)であると語っています。使徒の働きの中に、パウロが経験した二回の、一度はカイザリヤで(二四・27)、もう一度はローマでの(二八・30)各々の二年間の投獄の期間についての証言があります。ピリピでの一晩だけの投獄(使徒一六・23)は、当然この勘定には加えていません。しかし、使徒の働きの中に記されているパウロのいささか長びいた二回の投獄の経験の前に、彼は彼自身のことを、他のどの使徒よりも「牢に入れられたことも多く」(Ⅱコリント一一・23)と語ることができました。これらの数回に及ぶ投獄の中で、少なくとも一つが、彼のエペソ人に対する働きの期間のものであると信ずべき十分な理由があります。投獄の時と場所は、エペソ人への手紙の注解に大きな影響を与えません。しかし、ここで採用されている立場は一般的に認められているもので、エペソ人への手紙(ピリピ

人への手紙、コロサイ人への手紙、ピレモンへの手紙とともに）は、紀元六十年の初めから六十一年の終わりまでのパウロのローマでの投獄中のある時期に書かれたというものです。もしどうしてもパウロがどのような順序で書いたのかということが明らかにされなければならぬとしたら、エペソ人への手紙は教会に対する彼の手紙すべての最後、そしてコロサイ人への手紙を書いた直後と認めなければなりません。

三、受取人

エペソ人への手紙六章二一節以後とコロサイ人への手紙四章七節以後の比較は、エペソ人への手紙がコロサイ人への手紙と時を同じくしてテキコの手で宛先へ送られたことを明らかにします。ですから私たちは、両方の手紙の宛先を同じ地域の中に尋ねることができません。コロサイ人への手紙は、明らかにアジア地域のフリジア人の領土の中のコロサイにある教会に送られました。エペソ人への手紙一章一節の「エペソの」という言葉は、もし最も初期の、最も有力な権威のあるいくつかの写本がこの単語を省いているという事実がなかったなら、疑問の余地なくこの手紙の宛先を決定しているように思えます。もしパウ

口が、最も充実した三年間を過ごした教会に宛てて手紙を書いたのなら、このような個人的な宛名が欠落していることは、不思議です。手紙の全体的な特性を考えるなら、最も満足できる見方は、その手紙が、アジア地域にあるすべての教会に宛てられたもので、パウロはその中のいくつかの教会を個人的に知っていました。他の教会はそうではなかったということ（コロサイ二・1参照）。この手紙の内容は決して一つの地域教会だけに制限されるように意図されていないのですが、もし私たちが、それが、エペソを首都とする地方の諸教会に送られたということを感じているなら、その手紙を「エペソ人への手紙」と呼ぶことも許されるのです。

四、執筆の理由と主題

おおよそ三年にわたって——恐らく紀元五十二年の夏から五十五年の春まで——、パウロはアジアにおけるローマ領の主要都市であるエペソに本拠を据え、その町に強力な教会を創立しただけではなく、数名の同僚の助けを得て、その全地域に福音を宣べ伝えました。疑いもなく、ヨハネの黙示録一―三章の中に述べられているアジアの七つの教会のすべて